社説

自由な競争環境が重要だ

グーグル審査

公正取引委員会が独禁法違反（私的独占、不公正な取引方法）の疑いで米グーグルの審査に乗り出した。スマートフォン端末のメーカーに対し、アプリストアの搭載を認める代わりに、自社の検索サービスを優遇させるなどした疑いがあるという。違反が認定されれば、再発防止を求

巨大IT企業が市場の支配力を不当に維持しようとすれば、競合他社による新たな技術革新が生まれにくくなり、ひいては利用者の不利益となりかねない。健全な市場環境を確保するため、公取委には厳正な審査が求められる。

公取委によると、グーグルは端末メーカー側にスマホの初期状態でアプリストア「グーグルプレイ」の搭載を許可するにあたり、自社の検索

に配置するよう指定。さらに、競合他社の検索アプリを搭載しないことなどを条件に、収益の一部をメーカー側にも分配する契約を結んだ疑いがある。

グーグル側は「端末をカスタマイズする（好みに設定し直す）選択肢を提供している」と反論するが、こうした契約が事実なら、メーカーを巻き込んだ不当な囲い込みということになろう。

自社サービスの継続的な利用環境をつくりだすことで、他社がより便利で安価な検索サービスを提供し

なサービスが生まれる土壌がなくなってしまう可能性がある。

グーグルを含め「GAFA」と呼ばれる巨大IT企業は2000年代から広告や流通などさまざまな市場で支配的地位を占めるようになり、その圧倒的な影響力は国際社会でかねて問題視されてきた。

欧州連合（EU）は今年5月、巨大IT企業の支配力を制限し、新興企業がネット上で公正に競争できる環境を整備する「デジタル市場法」を施行。自社サービスの優遇などを禁じた。米国の司法省なども独禁

オピニオン opinion

書字と折本

竹本 義明 75 近世土佐文学研究会講師（高知市西久万）

60年前、高校1年の私は書道の授業で虞世南（ぐせいなん）の「孔子廟堂碑」を習った。その起筆と収筆が目立たない筆画、まっすぐで伸びやかな、気品あふれる線。私には書きにくかった。

大学で孫過庭（そんかてい）の「書譜」を習った時は、草書の字形に悩まされた。鹿持雅澄は須崎の下元西洲に勧められて、孫過庭らの書を練習したという。彼らにとって書字は「教養」そのものであった。

みなさんは折本（おりほん）をご存じだろうか。折本とは巻物用の用紙を継いで、巻かずに一定の幅で折り畳んだ本である。

普通、前と後に厚紙や木の板で表紙をつける。2ページ左右に開いても場を取らないし、小さな机の上に置いて習うには手ごろの大きさである。

字（書字）も有名な和漢の書家の作品が折本で出版され、それをじっくり勉強できた。

幕末の江戸で市河米庵（いちかわべいあん）・貫名菘翁（ぬきなすうおう）・巻菱湖（まきりょうこ）を三筆と称した。高知師範の川谷横雲は弟子に貫名の書を臨書するように勧めたので、与えた影響は大きい。米庵は唐様（からよう）書道の大家。菱湖は和漢の書法を研究し、習いやすく明治以後も広く流行した。私は彼らの書の折本も収集している。

この道は広くて深い、興味深い世界である。

スピリットアート展にて

林田 義雄 87（奈半利町乙）

第27回スピリットアート（県障害者美術展）が、県立美術館で開かれました。その展示台の一角に、「入選」。下に私の名前がありました。一瞬頰を幾筋もの涙が流れましたが、ぬぐうことができませんでした。事故で左足の機能を失い、生きる希望を失った十数年前の日々と重なった涙でした。

隣の会場では県展が開催され多くの見学者が来ていますが、スピリットアートって何だろう、誰の美術展だろうと迷っている方も多いのでは…。無理もありません、県展のような歴史もなければ、知名度もないに等しいスピリットアート。ですが障害者の創作力と表現力は健常者に勝るとも劣りません。

近年障害者に対する格差も是正、立法化され、国会でも活躍される時代となり、環境は整いつつあるがまだまだ私たちの満足できるものではありません。

このスピリットアートを通して県民の一人一人が心を動かされ、また障害者のさらなる制作意欲の向上、多様な能力に触れていただき、心豊かに暮らせる社会環境づくりに一役担っていただきたい、これが私の念願です。

13日は入賞者の表彰式がありました。来年は何を作ろうか、皆さんに感動されるような物って何があるだろう。三十数年ぶりに袖を通し、サラリーマン時代の古い背広で表彰式の会場に向かいました。

声ひろば

能勢 行雄 83（南国市物部）

日ごと深まる秋。読書週間（～11月9日）に合わせ、本にまつわる話題などもお待ちしています。

谷村さんさようなら

小笠原 隆政 68 学習塾経営（高知市桟橋通）

2023年10月16日、この知らせが飛び込んできて、私は声が出ませんでした。確か私と、わずか5歳くらいしか変わらなかったはずなのに…。

私が大学時代、谷村新司さんのグループは売り出し中で、地方の小さなライブハウスや市民会館などで演奏活動をしていました。

私は知人の紹介で、たまたまそのコンサートに行ったのですが、「アリス」というグループは知らなかったのです。しかし、コンサートは満員でした。

ですから彼らを知っているファンには、もう絶大な人気が当時あったのです。今思うと、彼らのヒット曲は当時のコンサートで演奏していた曲の中に、その匂いがあったように思います。

私はそれから、彼らの音楽を聴くようになりました。有名な曲しか知りませんが、シャンソン風でドラマチックなストーリーの「帰らざる日々」は今でもよく歌います。

「昴」を聴いた時に、わずか31歳でこんな人生を達観したような曲を書けるこの人は、漢詩の勉強でもしているのかとか思ったほど。人並み外れた作詞能力と、完成された音楽性を感じたのです。

古希近くなった今でも彼の歌に私は、心を動かされ勇気づけられます。彼の歌を私は歌い続けるでしょう。そして彼の歌う姿は、私の心の中に永遠に生き続ける事でしょう。心よりご冥福をお祈りいたします。